

中国地方山間盆地牛市の研究（その一）

岡山県久世牛市の場合

石田 寛
佐藤 雄一郎

本稿は岡山大学教育学部石田助教授から編者に贈呈を受けた研究集録から転載したもので、家畜市場及びこれにまつわるいわゆる博労などの実態が史実に研究された業績で、興味あるものと思います。編者

1 はしがき

明治年代における牛馬の分布をみると、畿内・中国ならびに四国・九州の北部は牛卓越地帯であり、周辺部は馬卓越地帯であった。牛地帯についてみると畿内では牛の比率が高いが、仔牛の生産はみられず（第1表）役肉牛の供給は専ら中国山地から仰いでいた。河内の駒ヶ谷には中国耕牛市がたち、中国山地には所々に上方博労と呼ばれ、専ら牡牛を上方へ送る大家畜商がいた。刈敷農業が未だ支配的であった中国山地では大型牡牛が多く、牡牛が役牛として重宝がられた。こゝり牡牛は東に送られるものが東牛、西方に送られるものが西牛と呼ばれた。備中千屋牛市は西牛供給市場、作州久世牛市は東牛供給市場として最も代表的なものであった。

このような位置にある久世牛市場を明治44年家畜市場法施行前後を中心に分析することによって、中国山地の農山村の変貌過程ならびに、日本における家畜流通の歴史地理的究明を試み、あわせて家畜市場法施行以前における博労問屋（博労宿）の実態を究明したい。

第1表 中国地方と近畿地方の国別畜牛状況の比較

		牛率(%)	産牛率	牝率
		牛/牛+馬	仔牛/牛	牝/牝+牡
中 国	因幡	83.0	16.2	39.4
	伯耆	72.5	9.2	38.1
	出雲	99.8	10.7	30.4
	石見	89.1	5.6	47.6
	美作	91.7	4.5	20.3
	備中	87.3	10.8	53.3
近 畿	山城	90.0	0	54.5
	大和	79.8	0	34.3
	河内	87.8	0	62.3
	和泉	94.0	0	80.4
	摂津	99.5	0	92.2

〔備考〕共武政表（明治13年）ヨリ作製

2 久世牛市の起源ならびにその歴史の変遷

久世町は岡山県北部中国山間盆地列の1つ勝山盆地に位置し陰陽をつなぐ出雲街道・山陰の倉吉へ通じる伯耆街道の分岐点に当り、伯耆街道の湯原からさらに大山へ通ずる大山街道が分岐する。中国山間を特色づけた“たたら”に支えられ、牛と結びつき、これが高瀬舟に支えられて美作西部の商業町宿場として栄えた。高田が城下町、落合が交通集落であったのに対して、久世は町人勢力が強く藩の統制の十分及ばぬ商業町であった。

作陽誌（元禄6年・長尾勝明編）によると、久世は出雲街道沿いの東西に町長5町の本町と南北方向をとる伯耆街道沿いに町長2町の長屋町があり、享保の古図にはL字型をした宿場のすがたが描かれている。

本陣・代官所及びここで取り扱う博労問屋は上町にあった。久世は享保2年（A・D・1717）まで津山藩に属し以後幕府の直轄地となっていた。久世牛市場の創始起源は必ずしも明らかでないが、少なくとも中世後期までさかのぼりうると思われる。慶長9年（A・D・1604）美作1円を区域とし毎年運上銀1枚を収めて公認市場となり、寛政年中（18Cの後半）にその最盛を極め3万頭の売買があった（久世家畜市場開設請願書）といわれる。久世市の場合も明治44年の家畜市場法設立以前には問屋単位に市が開かれていたことはいままでのない。久世市場は高粱市場の如く藩営のものでなく民間の半農半商的なものであった。問屋の口伝及び真庭郡誌によると8軒問屋のうち、最も古いといわれる後安家（南中屋）はもともと上ヶ市に屋敷があったが、その荒神様（商売及び牛の神様）に近郷の農夫が牛を厄除けにつれてくるので、その牛の交換売買をするようになった。このようなことから後安家が荒神様付近で牛市を始めたのが久世牛市の起源と言われている（後安福次郎氏76才、横山宏一71才談）また上ヶ市は伯耆街道ぞいの1台地（宮芝）で久世に入る牛はここで必ず一休みして盛装したものである。

岡山畜産便り1959.06

久世牛市はこのようにして自然的に成立したもので、高梁市の藩営起源に対し民間発生によるものと言ってよかろう。久世に宿場町が発展し、後安家も上ヶ市から上町にうつり、牛馬問屋として市場を開き博労宿も兼ねるようになったのである。そのご次第に盛んになるにつれ問屋数を増し後安家を中心として8戸の多きを数えるにいたって盛況をみた。本陣も博労問屋もこの上町にあって、上町は繁栄を極めた。

後安家を始めとして古くから大きい問屋は第2表の如くである。問屋はそれぞれ屋号をもち、はがやは④の商標をもって“はがや市”と呼ばれ、また他の問屋もそれぞれ商標と市の名を屋号につけていた。上・中・下の玉屋は本玉屋から分家したものであり、はがやはもとは上町で市を開いたが後に中町で市を開くようになった。このように問屋が上町を中心に軒を連らねて、それぞれ個々別々に市場を開きまた博労宿を兼ねた。出雲街道をはさんで問屋の裏に杭を打って牛をつなぎ、そのため北側の問屋裏の畠と南側の問屋裏の旭川の河原は上町から中町まで牛でうずまった。軒を並べる各問屋はそれぞれ得意先と特色をもち、買い手客筋、売り手客筋、さらに地域別に問屋はほぼ定まっておき、また客の博労も代々同じ問屋と取引し問屋を替えることを一代の恥とした。博労問屋は平生は農業を営み牛市期間中だけ博労問屋・宿屋となっていたのであるが、問屋はたとえばつぎのように得意先が決っていた。

大庭屋 備中筋なかでも上房郡の売り手多し

久世屋 他県から買いに来る者多し

南中屋 旭川沿い久米郡・真庭郡・御津郡からの買い手多し

はがや 出雲街道沿いの西部・久世より津山付近・伯耆方面の売り手客多し

津山屋・うるし屋は博労宿ではあるが、博労問屋でなかったため牛つなぎ場も“まや”も持たず人だけが宿泊する博労宿である。博労宿南中屋の宿帳をのぞいてみると第3表の通りである。

南中屋宿泊の博労は阿哲・真庭・久米・御津の4郡の者で占められ、その外はわずかに赤磐郡の人がいるだけで取るに足りない。大部分が牡牛地帯の人である。久世市場の特色は開市日数が26日にも及ぶ秋市の盛況であり、そこから畿内に向けて送られる“東牛”で

あった。この町で一番古い南中屋（後安家）は代々東牛を専門に取り扱ってきた問屋で、大阪の駒ヶ谷に3才牡牛を上らせたのである。そのために駒ヶ谷には南中屋の厩・納屋などが置かれていて、現在もなお「後安」と銘打った牛桶が駒ヶ谷に残っているということである。東牛を1回追って畿内へ行ってくると田地1反分の収益があったと語り伝えられている。南中屋（後安家）はこの意味で数多くある久世の問屋の中でただ単に問屋の創始者というだけでなく最も典型的な久世のタイプであった。南中屋は久世市場を特色づけた「東牛」を近畿市場に送り込んだ「上方博労」であり、「牡牛」を専門に取扱うが故に牡師とも称せられた。

上町を中心とする街道筋に問屋が集中し、各問屋は既に専門と得意先をもっていた事は前述の通りである。取引はすべて買手をまずきめてから市場に来て取引する方法いわば注文取引であった。値段をきめるには売り手と買い手の間に伴僧（仲立人）がはいり、売り手と買い手が手をたたいて決めたのである。取引は本人同志で行ったのである。取引は本人同志で行ったのである。市が始まると問屋の入口に帳面を置き問屋の金銭関係はここで行われた。すなわち博労問屋は入場料・手数料（1頭につき8銭）・宿泊料の3つをうることができた。市の最盛期には1軒の問屋に100人前後の宿泊者があり一番大きな南中屋には毎日120人くらい期間中宿泊した。座敷、居間の区別なくまた部屋の数にも制限なく1つのふとんに2、3人寝る事もあり、また問屋から布団と炭火を運んで牛小屋に寝起きし食事だけ問屋に来てするような者もあった。食事は朝から晩まで絶える事なくそのため問屋では水汲み男、雑役男を雇い調理は一斗釜でなされた。秋大市の1期間に一度だけしか来ない博労もいたが、期間中に3回も牛を連れてきて売買する博労も多かった。それは資本の少ない下層博労は一度に大金の調達が出来なかったからである。

久世牛市は開市が古くしかも関西6大牛市としてきこえた牛市だけあって、交換経済の発達と共にその取引頭数も増加して行った。寛永年間に松山市場（高梁）、元禄年間に新見市場の開設をみるに至ったが、久世市場は益々隆盛に赴き、寛政年間に最も栄え、寛政6年寅年4月には牛冥加銀として銀33匁を納めて

岡山畜産便り1959.06

いる（久世原方村丑御年御年貢皆済目録）。因みに千屋市場の開設はおくれて天保年間である。かくて幕末期には各地に牛市が設立され、やがて明治の訪れと共に和牛の流通は活発になった。明治45年山陰線開通と共に西日本牛馬市の王座を占めていた大山博労座も次第に衰退におもむき近代的な輸送手段は和牛生産地帯の街道筋に栄えた牛馬市場に取って代り鉄道を中心とする交通の要衝に集散市場又は中継市場の発展を促すようになり、更に明治44年の家畜市場法は今迄の市場組織を一変させた（中国農試、和牛の流通）。久世市場の場合中世から続いた問屋単位の取引は整理統合され、問屋制度の組織から資本金5,000円の久世定期家畜市場株式会社に移行し問屋は株主となったが市場経営から引退し役員として関係しながら問屋から博労宿へ変貌していったのである。博労問屋の運命は問屋から博労宿へという機能縮小の問題以上に発展しかけた。勝山が家畜市場を誘致しようとして猛運動を起したため、久世は久世市場の過去現在を述べ（久世家畜市場開設請願書）久世市場設立のため博労問屋が一体となって立ったのであった。従って博労問屋にとっては、久世に新市場設立をみてその博労宿として生き残り得たことはせめてもの幸であった。家畜市場法による久世家畜市場ができてからも、しばらくの間は博労宿で旧態依然たる取引が行われた。このような取引が残っている限り博労宿は繁栄を続けえたが、それも長続はせず、博労問屋としての機能は失われ、単なる博労宿としての博労と牛馬を宿泊させる宿舎になったが、それも交通の発達とともに宿る博労・牛馬が減少していった。

博労宿は久世定期市場参加の博労ならびに牛馬のみならず、牛馬を端引して市から市へ往来する人々に宿を供給していた。出雲街道・大山街道には牛つなぎ場を持つ宿屋が一定の間隔を置いてあった。このような宿場町のうちで久世は最も大規模なものであった。昭和2年6月家畜市場株式会社の経営組織は5,750円で畜産組合の手に移り畜産組合が市場を経営するようになった。戦中、戦後の度々の統合、解散を経て今日では真庭畜連の経営になっている。

編者注 写真が10葉（現在の久世家畜市場と現在町にある博労宿その他）であります。紙面の都合で割愛させて戴きました不忠実をお詫びいたします。

第2表 博労宿一覧表

屋 号			
は	が	や	古くて大きい博労問屋兼博労宿 ただし「はがや」は他の商賈に転業
南	中	屋	
下	玉	屋	
上	玉	屋	
か	じ	や	
ひっ	こみ	や	比較的新しい博労宿 ただし伯耆屋、本玉屋は今では博労宿をやめている
引	込	屋	
おう	ば	や	
大	庭	屋	
久世屋（河内屋）			
伯	耆	屋	比較的新しい博労宿 ただし伯耆屋、本玉屋は今では博労宿をやめている
本	玉	屋	
新	影	山	
う	る	し	
津	山	屋	

第3表 南中屋における地域別宿泊人数

	大正9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	昭和2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	20年	22年	24年
真庭郡	29	31	33	33	32	32	11	15	4	34	17	20	33	16	13	11	10	7	8	0	2	12
阿哲郡	10	11	4	3	4	3	2	0	0	3	2	4	12	4	0	1	0	2	0	0	0	1
久米郡	18	19	18	10	12	16	36	10	8	19	28	17	5	15	8	12	0	8	9	9	0	16
御津郡	5	11	11	9	11	17	9	8	8	5	2	7	0	4	14	7	20	4	11	15	16	22

〔備考〕南中屋宿泊人名簿

岡山畜産便り1959.06

第1図 博労問屋（博労宿）見取図

